

## 漢代絹の一名「鮮支」に就いて

原 田 淑 人

後漢の許慎の説文解字第十三上絲の部に縛の字を解して「縛白鮮色也」といひ、同じく縞の字を釋いて「縞鮮色也」といふてゐる。岩崎家靜嘉堂本宋版説文解字を始めとし現存諸本凡てがさうなつてゐる。然るに、唐の顏師古は前漢書地理志の「厭篋玄織縞」とあるに注して、

玄黒也、織細縞也、縞鮮支也、卽今所謂素者也、言獻黒細縞及鮮支也

といひ、なほ史記竝に漢書の司馬相如列傳及び文選子虛賦の「被阿錫揄紵縞」の句にも「縞鮮支也卽今所謂素者也」といつて同一説明を下してゐる。顏師古が「縞鮮支也」と解釋したのは、恐らく説文解字に據つたものと推測されるから、唐代の説文解字には今の刊行本と異がつて「縞鮮支也」と記るされてゐたのであらう。清の任大椿はその釋論に、

案説文縞鮮色也、以史記司馬相如傳正義及漢書地理志文選子虛賦註證之則鮮色或卽鮮支歟

(522)

といふて、刊行本の説文解字に疑問を投げてゐる。又急就稿の「漆栗絹緋紅縹」の句に、顏師古は注して「絹一名鮮支」といひ、廣雅には「鮮支絹也」といふてゐる。之に對して任大椿は同じく釋綉に、

案説文曰縛白鮮色、以廣雅及急就稿註證之則鮮色亦卽鮮支歟說文緋縛異字

と論じてゐる。恐らく唐代の説文解字には「縛白鮮支也」と見えてゐたものと察せられるのである。

されば、段玉裁は鮮支が鮮色と誤まつた理由に就いて自説を提出してゐる。即ちその説文解字注第十三上に「縛白鮮色也」とあるを訂して「縛白鮮支也」と爲し、之に注して、

「卮多本作色、今正、下文云、縞鮮卮也、今本譌鮮色、則此色譌亦同、卮與支音同、縞爲鮮支、縛爲鮮支之白者

といひ、又「縛鮮色也」とあるを改めて「縞鮮卮也」と爲し、之に注して、

各本作鮮色、今正、漢書地理志師古註縞鮮支也、司馬相如傳正同顏語、多本説文彼時未誤、蓋支亦作卮、因譌色也、廣雅縹總鮮支縞也、許謂縞卽鮮支

と述べてゐる。何れにせよ、説文解字諸本に「縞鮮色也」とあり、又「縛白鮮色也」とあるのは、その意義からして解し難い。而かも現行説文解字には往々にして誤字が存在するのであつて、例へば卷第七下錦の字に「錦襄色織文也」とあるのは明かに「錦襄邑織文也」の誤である。現に靜嘉堂本の説

文解字には立派に「襄邑織文也」と記るされてゐる。漢代襄邑(河南省睢縣)が錦繡の製造地として盛名を走せたことは、太平御覽所引の陳留風俗傳に「襄邑有黼黻漢錦」とあり、又水經注所引の同書に「縣南謂漢有渙水、故傳曰睢渙之間出文章、天子郊廟御服出焉」とあり、なほ王充論衡程材篇に「襄邑俗織錦」といひ、後漢書輿服志に祭服を述べた最後に、「皆織成、陳留襄邑獻之云」といふてゐるので推察されるのである。既述の如く襄邑の邑の字は靜嘉堂本には正しく記るされてゐるが、同じく宋版である翟氏藏本の説文解字通釋には早くも誤つて色の字になつてゐる。即ち現行本の「襄色」とあるのも已に宋代からの誤寫であることが想像される。従つて鮮支(或は鮮卮)が鮮色と誤つたといふ任段兩氏の説に對して余輩は賛意を表するものである。併乍ら鮮色を鮮支としても又鮮卮としてもその意義は依然として不可解といはねばならない。又任段兩氏とも之れが解釋を與へてゐない。余輩はその意義を考察するに先つて鮮支といふ一名を與へられた縞及び白鮮支なりと解釋された縛の本質に就いて検査して見よう。

## 二

縞の本質を諸文獻の上から尋ねて見ると、先づ第一に縞は生帛である。任大椿は釋縞に、

王制、縞衣而養老、正義白色生絹曰縞、玉藻、弟子縞帶、正義以生縞爲帶、縞冠素紕、正義縞是生絹而近古、案廣雅縞練也、文選雪賦縞纈則萬頃同縞、註亦引廣雅縞練也、考練爲紕帛、縞爲生

(523)

(624)

帛、生熟異治而質則略同、故廣雅又以練訓縞也

といひ、縞は生帛であるが、その質の略似てゐるところから、時に熟帛であるべき練と同一視されることを説いてゐる。支那の字訓の例としては、屢々形なり質なり近似のものを以て解釋することがあるから、假令縞練二物に生熟の區別があるにせよ、兩者を混同融通して相互の字訓とするのも決して怪むに足らない。要するに以上の文獻よりすると、縞は生帛即ち生絲を以て織つた絹布であることが知られる。次に縞は細縞である。任大椿は釋縞に之に關する文獻を擧げて、

詩、縞衣綦甲、正義縞細縞也、戰國策、強弩之餘、不能穿魯縞、註然則縞是薄縞不染、故色白也、楚詞招魂、纂組綺縞、補註縞一曰細縞、淮南子兵略訓、雖有薄縞之縞、註縞細縞也、漢書食貨志、履絲屨縞、師古註縞皓素也、縞之精白者也、後漢書順帝紀、茂陵園寢焚皆縞素、註縞之精白者曰縞、小爾雅、縞之精者曰縞、廣雅縞細縞也、文選子虛賦、揄紵縞、司馬彪曰縞細縞也、曹植雜詩、綺縞何繽紛、註引小爾雅曰縞之精者曰縞

といひ、之に依り縞を推定して「今之生熟薄縞、其近于縞歟」といふてゐる。此等の文獻から見ると、縞は薄い絹布であることが知られる。第三には縞は素である。任氏は釋縞に、

楚詞招魂、纂組綺縞、補註縞素也、漢書高帝紀、兵皆縞素、註縞白素也、張良傳、宜縞素爲質、師古註、縞白素也、韓安國傳、強弩之末力、不能入魯縞、師古註、縞素也、案玉藻、大夫以上素帶、

士練帶、素練質雖相近、而素生練熟、士帶用練、變於大夫以上也、又考小爾雅曰、縞之精者曰縞、縞之粗者曰素、縞細於素、大夫以上帶素、弟子反用縞者、考童子錦紳、錦至文細、童子紳得用錦、猶弟子帶得用縞也、蓋弟子未能遠別、不與大夫較精粗也、玉藻、縞冠素紕、正義云、當祥祭之時、縞冠以其漸吉、若既祥之後、微申孝子哀情、故加以素紕、以素重於縞、以上正義凡服以粗者爲重、細者爲輕、孔正義謂、素重於縞爲申哀情、可以證小爾雅縞之粗者爲素矣

といふてゐる。任氏は縞素二物の別を論じ、縞の精にして素の粗なることを述べてゐるが、説文解字や玉篇には素を解釋して白緻縞といふてゐるから、縞を素と同一視するのも支那の字訓法から見ても無理もない。假令縞と素とは別物であるにせよ、此等の文獻から縞が無地の絹布であることが知られる。以上を総合すると、縞は無地の薄い生絹である。而も説文解字に縞を特に「白鮮支也」といふに對して、縞は單に「鮮支也」と解せられてゐるから、縞が縞に比して餘り純白で無いことが推想されるのである。

次は縞である。李登の聲類には縞を絹と同字としてゐるが、説文解字には截然と別字にされてゐる。之に就いて段玉裁は次の如くいふてゐる。

聘禮、束紼注曰、紼、紼紼爲之、今之縞也、周禮、素沙注曰、素沙者今之白縞也、釋文皆引説文居椽反、聲類以爲今正絹字、按據許則縞與絹各物、音近而義殊、二禮之鄭注、自謂縞、不謂絹也、

( 725 )

縹以其質盛名之、字从專、絹以色如麥稻名之、字从冂、李登作聲類時已失其傳矣。絹に就いては、説文解字卷第十三上に「絹如麥稻」とあるが、段玉裁は色の一字を補つて「絹如麥稻色」とし、その理由を次の如く説明してゐる。

色字今補、色譌也、而俗刪之耳、自絹至緹廿三篆、皆繪帛之色、而此色字、先之聲類淵縹縹爲一字、由不考其義之殊也、縹者麥蘗也、繪色如麥蘗青色也

絹が繪帛の質を指さずして單にその色の名であることは、前漢史游の急就篇に「烝粟絹紺縹紅縹」とあつて、何れも繪帛の色を示してゐることで明白である。然るに、顏師古は之に注して、

烝粟黃色、若烝熟之粟也、絹生白繪、似縹而疏者也、一名鮮文、紺青而赤色也、縹淺赤也、紅色赤而白也、縹者紅色之尤深、言若火之燃也

といひ、烝粟等は皆な色の名として解釋しながら、絹のみは質を主として説明してゐる。聊不備といはねばならない。段玉裁が「絹」といふ色を麥蘗色としたのは贊成であるが、之を青色と解したのは如何であらうか。之は恐らく禮記聘禮の「束帛加縹」とある句の鄭玄の註に「帛今之縹色縹」とあり、又賈公彥の疏に、

帛今之縹色繪者、宗伯云、以蒼縹禮天、下云、牲幣各放其器之色、禮天之縹用蒼色、則幣帛之色亦蒼色、是縹色繪、于漢時云縹色繪者、亦因周法、則此束幣亦與禮同

とあり、更に任大椿の釋繪に、

據賈此疏、以縹色爲蒼色、而鄭註以帛爲縹色繪、或漢時帛色在蒼白之間、亦猶釋名縹色綠、淮南子謂縹性黃、其實帛綿縹本質皆白、而當時染色各別、故各舉其習見者言之耳

とあることなどから考察したものであらう。併乍ら麥蘗即ち麥葉の色といへば寧ろ淡い黄青色と解するのが常識的であつて、蒙古語で絹を *Shelan* といいに對して、藁色を *Shelan* といいの絹と藁色との關係を示唆するものとすへよう。元來漢代の絹布には色の白いものと黄のものがあつて、淮南子齊俗訓にも、

夫素之質白、染之以涅則黑、練之性黃、染之以丹則赤

と見えてゐる。縹も亦普通の平織絹である。思ふに、縹は寧ろ黄味を帯びた生絹で、縹はその白色のものであらう。

### 三

前項に於いて余輩は一名を鮮文と呼んだ絹が無地の平絹で、而かも生絲で織られたものであり、縹が縹の特に白色を呈するものであることを推定したが、然らば鮮文とは如何なる意味の言語であらうか。前述の如く、現行説文の鮮色は誤字としても、鄭玄の鮮文竝に段玉裁の鮮厄共に之を支那語としては全く解釋に苦しむところである。余輩は言語學に對して門外漢であるが、試に一臆説を提出して

見よう。

鮮の字は支那現行音では *Si-mi* であるが、古音は *Si-mi* 又は *Si-mi* と響いたであらう。白鳥先生の高説に據ると、漢代罽賓國の都城循(修)鮮は波斯語 *Saman* の對譯であり(東洋學報七の一罽賓考)、鮮卑(屨毗)は滿洲語 *Si-mi* の譯語である(史學雜誌二十一の七東胡民族考)。鮮支の場合、鮮は恐らく *Si-mi* であらう。又支は支那現行音は *Si* であるが、古音に *Si* 又は *Si* のあつたことは、漢代焉耆山が一に焉支山とも書かれたので明かである(東洋學報三の二白鳥先生西域史上の新研究四)。従つて漢代鮮支の二字は *Si-mi* 又は *Si-mi* と發音されたものと見て差支へない。之に就いて直ちに思ひ合はずのは絹を意味する蒙古語 *Si-mi* と滿洲語 *Si-mi* と波斯語 *Si-mi* 等の聲音である。鮮支(*Si-mi*) が此等の外國語と關係あるものと想像しても必しも不合理ではあるまい。漢代に於いて支那の絹布が北方竝に西方民族の間に賜與せられ又輸入されて、彼等の愛好の的となつたことは改めて説く必要もないが、錦繡綺殺綾羅の如き特殊な貴重絹布は、支那内地ですら高價であつたから、匈奴や西域へ輸られたにしても、その需用者は相當上流階級か或は富裕者でなければなるまい。彼等一般に愛用された絹布は、恐らく縞縹又は縹などの名で呼ばれた普通の平絹であつたことが推想される。従つて説文解字に縞を特に鮮支といふたのもその間の消息を傳へるものといふべきであらう。而して元來外國から傳來した物件は多くその原産地の名稱をそのまゝ冠するのであつて、琉璃の如き葡萄の如きその一例である。然るに、漢代に於いて支那自身の特産である絹布に對して、外民族が呼稱した鮮支の名を當てたことは聊か不思議に考へられる。併乍ら鮮支の場合は琉璃や葡萄とは少しく趣を異にしてゐる。即ち琉璃や葡萄はその原地が全く外國にあるから支那固有名は無い。之に反して鮮支は立派に縞といふ本來の名稱を有つてゐる。唯縞の字の解釋に用ゐたに過ぎないのである。換言すれば、許慎が縞の字を解釋するのに、當時外民族は勿論、之と取引した商賈が常に用ゐてゐた、而かも一般人も耳にもし口にもしてゐた鮮支の名を以てしたものと見てよいのである。若し以上の臆説が幸にして許るざれとすれば、漢代に於ける絹布の外國取引が、支那人自身まで絹布の一種を鮮支の名を以て呼び慣れた位盛んであつたことを物語るものとならるのである。